

「介護人」 スティーヴンス

——『日の名残り』における空白の歳月——

松 宮 園 子

Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day* (1989) は、英国貴族の大邸宅であるダーリントン・ホールに仕える老執事の「告白小説」と見なすことができる。屋敷の使用人不足の問題を解決するためという口実のもと、30年余りに及ぶ奉公生活において初めてと言える長期の休暇を取り、英国南部を車で旅する機会を得た彼は、凶らずも自らの内に眠る過去の記憶へと分け入ることを余儀なくされる。Saint Augustine の *Confessions* に代表される告白のナラティブというジャンルを巡る考察において、Mark Currie は、一人称の語り手による “narrated time” である過去が、語り手の「現在」である “the time of the narrative” に迫り来る瞬間の「クライシス」を指摘し、“When exactly did the liar of the past transform into the honest narrator of the present?” (61) と問いかけるが、執事 Stevens の語りにおいて、この問いへの明確な答えを見出すことはとりわけ困難である。なぜならそこには1920年代から30年代にかけてのダーリントン・ホールを舞台に繰り広げられた彼のキャリアにおける「最良の日々」という過去と、1956年夏に進行中の自動車旅行における直近の過去が存在しており、彼はこの二種類の時間を一見心の赴くままに交錯させていくからである。更に、数十年に及ぶ時間的隔たりにもかかわらず、戦間期のスティーヴンスと現在のスティーヴンスには精神的にほとんど変化が見受けられず、語り手スティーヴンスが自らの過去の過ちを告白することなど、物語の当初には不可能にさえ思われる。それにもかかわらず、David Lodge のお墨付きを与えられたこの有名な「信頼できない語り手」は、自らの語りの中で決定的な転回点を迎え、完全

なものではないにせよ、ある種の倫理的变化を達成することとなる。

Patricia Waughはイシグロを“a late modernist”(29)と評し、彼の“depth”と“the exploration of interior consciousness”(13)をモダニストの特徴として挙げている。確かに、彼が構築したスティーヴンスの精妙な語りの構造は、内的時間と外的時間の複雑な絡み合いへのモダニスト的関心を如実に示している。モダニズムを代表するVirginia Woolfの*Mrs Dalloway* (1925)に関する議論において、Paul Ricouerは“a simplistic opposition between clock time and internal time”(108)に警鐘を鳴らし、この作品の中に織り込まれた「過去」の時間軸が果たす機能について以下のように論じている。

These long sequences of silent thoughts—or what amounts to the same thing, of internal discourse—not only constitute flashbacks that, paradoxically, make the narrated time advance by delaying it, they hollow out from within the instant of the event in thought, they amplify from within the moments of narrated time, so that the total interval of the narrative, despite its relative brevity, seems rich with an implied immensity. (103-4)

リクルールによるこの指摘は、スティーヴンスの内的時間についても見事に当てはまる。過去へと遡る彼の内なる時間の逆行は、彼の語りを前進させ、更には彼の倫理の変貌を可能にする原動力となっている。前述したとおり、現在のスティーヴンスは若き日の理想や信念をそのまま保ち続けており、肉体的に衰えたとは言え、精神的にはあたかもかつての彼が冷凍保存されているかのようと思われる。それゆえに、新しいアメリカ人の主人が彼の余りに閉鎖された生き方を揶揄した時、彼は誇らしげに“*It has been my privilege to see the best of England over the years, sir, within these very walls*”(4)と述べるのである。しか

1 著書*The Art of Fiction* (1992)中の“The Unreliable Narrator”の章において、ロッジは『日の名残り』のテキストを冒頭に掲げ、スティーヴンスの語りをケース・スタディとして使用している。

しながら、この頑丈な壁に守られた屋敷から離れ、一人車を走らせる中で、彼は期せずして自身の記憶の「闇の奥」へと彷徨いこむことになる。旅行中に起こる予期せぬ出来事や、見知らぬ土地の人々との会話が、自らの過去についてのスティーヴンスの堅牢な自信を少しずつ揺るがせていき、遂には彼がダーリントン・ホールで見てきたものが「最良の英国」とは程遠いことが明らかになり、彼は自身の闇と対峙することになる。

本稿では、時系列的に配置されたスティーヴンスの旅の記録の中の二種類の時間の交錯を注視しながら、カーリーが問題提起した語り手の変貌の瞬間とその要因を検証していく。その中で特に注目したいのは、スティーヴンスの二つの時間の中に位置する、第二次世界大戦中から現在に至る期間の重要性である。作品の発表当初からスティーヴンスの語りの重層性、その「不確実性」の機微については数多の研究が為されてきたが、²彼の語りの中の顕著な「空白」の存在についての精査はほとんど行われていない。しかしこの空白の十数年こそがスティーヴンスの告白を可能にしたものであり、彼の変貌をもたらす鍵であることを明らかにしていきたい。

1

常に過去とその記憶がキャラクターの、ひいては作品世界全体の根幹を成すイシグロの小説の中で、『日の名残り』は最も綿密に時間軸に沿って構成されたものと言える。「プロローグ・1956年7月 ダーリントン・ホール」に始まるテキストは、その後「1日目・夜 ソールズベリー」から「6日目・夕刻 ウェイマス」に至る7つのパートに分かれ、スティーヴンスの自動車旅行の雑誌の体裁を取るこれらのパートにおいて、彼の時間的、空間的移動は、各地の宿で、あるいは小休止を取る店先のテーブルで、彼自身の手により詳細に記録される。しかし数時間前の、時に数分前のこの直近の過去の枠組みの中で、スティーヴ

2 『日の名残り』の語りに関する最近の研究例では、James Phelanがその“unreliability”を詳細に分類しながらスティーヴンスの倫理的立ち位置を検証している。

ンスは頻繁に数十年前の自らの遠い記憶を甦らせ、その記憶の中に没入していく。下の図で示すように、幾つかの例外はあるものの、彼の語りの中の二つの過去は、共に概ね時の流れを前進する形で動いていく。つまり「2日目・朝」のパートにおいては、女中頭のMiss Kentonと自分の父親がダーリントン・ホールで働き始めた年である1922年が回想され、「4日目・午後」ではその彼女が退職する1936年の模様が描写されている。

	1956年時点に関する記述	過去の記憶に関する記述
1日目・夜	出発 ソールズベリーに到着	過去に父親が示した「品格」の思い出
2日目・朝	眠れぬ一夜 前日に会った農家の女性との会話	1922年のMiss Kentonと父親の勤務開始 1923年の会議、父親の死
2日目・午後	トラブルを救ってくれた運転手への嘘	数か月前の、屋敷を訪れた客人への嘘
3日目・朝	前夜を過ごした宿について 朝のお茶の様子	1930年代におけるLord Darlingtonとナチスの関係
3日目・夜	Mr. Taylorの家での村人への嘘 Dr. Carlisle との出会い	1930年代のユダヤ人女中の解雇 Miss Kentonのお婆の死
4日目・午後	Dr. Carlisleとの朝の会話 リトル・コンプトンに到着	1936年の秘密会議 Miss Kentonの婚約
6日目・夕刻	4日目のMiss Kentonとの再会 直前に起こった波止場での男との会話	

遠い戦間期の過去と、現在進行中の自動車旅行のエピソードの両方の語りにおけるスティーヴンスの「嘘」は、同僚ミス・ケントンと主人であるLord Darlingtonを巡るのが中心であるが、彼がその「嘘」を直視し、真実に目覚める過程はそれぞれのケースで異なることにまず留意したい。テキストの結末近くで起こるミス・ケントンとの20年ぶりの再会と、その場での彼女からの率直な告白は、彼女に対する真の気持ちを長年押し隠してきたスティーヴンスの

偽りと自己弁護を一瞬にして粉碎するに十分な力を持っている。彼と共に歩んだかもしれない別の人生を夢想する、という今はMrs Bennとなった彼女の言葉を聞いた瞬間について、語り手スティーヴンスは“Indeed—why should I not admit it?—at that moment, my heart was breaking”(239)と述懐する。勿論、それでも彼が付け加えずにはいられない“why should I not admit it?”という「聞き手」を意識した、一種儀礼的な躊躇いは、彼の語りを取り囲む防御壁のただならぬ頑丈さを示しているが、一方でそれゆえに後に続く“my heart was breaking”という直截な言葉に潜む悲哀が強調されている。この時点で、ミス・ケントンとの関係は職業的なものに留まるというこれまでの「嘘」を捨て、スティーヴンスは確かに彼の真実を初めて「告白」という局面に達したと考えられる。

しかし多くの読者にとって、スティーヴンスの更に決定的な「告白」の瞬間は、小説の最終パートで描かれる港町ウェイマスの波止場のベンチで、通りすがりの元執事である男性に対し、彼が涙ながらに語る場面であろう：“You see, I trusted. I trusted in his lordship’s wisdom. All those years I served him, I trusted I was doing something worthwhile. I can’t even say I made my own mistakes. Really—one has to ask oneself—what dignity is there in that?”(243: イシグロによる強調)。この有名な場面においてスティーヴンスは、それまでの強硬な自己弁護の調子から一変し、彼の人生の全てであったダーリントン卿への忠誠が「価値のあるもの」ではなかったこと、そして自らの人生が「品格」あるものではなかったことを認め、告白するのである。

しかし上記のミス・ケントンとの関係の場合と異なり、このダーリントン卿に関するスティーヴンスの突然の転向の原因となる要素の特定は、実は容易ではない。そもそも、ダーリントン卿に関する彼の「嘘」が何だったのか、という点も実は明確には示されていないのではないだろうか。一般的に理解されている彼の「嘘」は、ナチス・ドイツの思うままに利用され、政治外交的に誤った選択を行った主人について、戦間期の只中においても、また彼の死後においても、表向きにはその「偉大さ」を褒め称え、批判の一切を「ナンセンス」と

しながらも、実はその誤りを認識しており、現在では彼への奉公を他人に隠すまでに恥じていた、ということにまとめられるだろう。³しかし実は、ダーリントン卿という人物に関する情報は非常に限られており、例えばメディアによって広げられた「ナンセンス」にどれほどの真実が含まれていたのか、あるいは彼に対する戦後社会の断罪は実際の行為に比して厳しすぎるものであったのか否か、というような問いへの答えをテキスト中から見出すことは難しい。余りにも偏った見方のスティーヴンスを除いて、実際に彼と接した上でダーリントン卿について語るのは、1923年の国際会議に出席したアメリカ人Lewisと、彼の名づけ子であるジャーナリストのCardinalのみである。彼と長年家族同様に交流してきた後者は、1936年の段階でルイスによるダーリントン卿批判は正しかったと断言し、“a true old English gentleman”(223)である彼がナチスに操られ、“a pawn”(222)として利用されながら、英国王のAdolf Hitler訪問を画策していることをスティーヴンスに明かす。この場面においてもスティーヴンスは、危機感に駆られるカーディナルの懇願と説得にも一切耳を貸すことなく、ただ主人への絶対の信頼と忠誠のみを繰り返す。こうした「見て見ぬふり」の偽りの忠誠が、彼の「嘘」の根幹なのだろうか。⁴それならば、彼の死後、現在に至るまで続く彼の「嘘」は如何にして崩れ、ウェイマスの波止場での「告白」が如何に可能となるのだろうか。次の章で、当時の歴史的状況を踏まえながらダーリントン卿の「過ち」について詳しく検証すると共に、スティーヴンスの心の動きについて更に詳しく考察していく。

3 例えばYugin Teoは“... Stevens can realize the extent to which he has been deluding himself regarding the significance of his work at Darlington Hall and the real implications of the work Lord Darlington had done”(29)と述べている。

4 PhelanはStevensの認識度に関して、彼がかつてダーリントン卿の執事であったことを否定してみせるエピソードを捉え、次のように論じている：“When Stevens rationalizes his lying about having worked for Lord Darlington, he is misregarding: ... his denials suggest that at some level of consciousness he knows it is untrue”(51).

2

ウェイマスでの告白の直前のパートである「4日目・午後」において、彼は正にカーディナルがダーリントン卿の愚行として糾弾する、ダーリントン・ホールでの英国首相とドイツ大使との秘密会談が行われた1936年の“an extremely tiring evening”(227)について回想する。実はこの同じ夜、彼はミス・ケントンから突然に婚約したことを打ち明けられているのだが、この知らせにも一切動じず職業的義務に全精力を傾注した過去の自分の姿を、語り手スティーヴンスは混じり気のない自賛の念をこめて描写する。

And there across the hall, behind the very doors upon which my gaze was then resting, within the very room where I had just executed my duties, the most powerful gentlemen of Europe were conferring over the fate of our continent. Who would doubt at that moment that I had indeed come as close to the great hub of things as any butler could wish? I would suppose, then, that as I stood there pondering the events of the evening—those that had unfolded and those still in the process of doing so—they appeared to me a sort of summary of all that I had come to achieve thus far in my life. I can see few other explanations for that sense of triumph I came to be uplifted by that night. (227)

最終行の現在時制が示すとおり、ここで語り手スティーヴンスは20年前の夜に抱いた自らのキャリアにおける頂点での達成感を、一切皮肉を交えることなく語っているのである。

この晩の会合に出席した“the most powerful gentlemen of Europe”の中には後にニュルンベルク裁判において第二次世界大戦の戦犯として処刑されることになる当時の駐英ドイツ大使Joachim von Ribbentropがいたと設定されている。『日の名残り』の中では、Oswald Mosley等の戦間期に実在した数人の政

治家がダーリントン卿との関わりにおいて言及されるのだが、ここで主人の政治姿勢についてのスティーヴンスの評価の揺れを示す鍵として、彼のリップントロップへのコメントに注目してみたい。このパートに先立つ「3日目・朝」において、スティーヴンスはリップントロップが現在では“a trickster”(144)と見なされていることを認めながら、次のように言葉を続ける。

As I say, this is the commonly held view and I do not wish to differ with it here. It is, however, rather irksome to have to hear people talking today as though they were never for a moment taken in by Herr Ribbentrop — as though Lord Darlington was alone in believing Herr Ribbentrop an honourable gentleman and developing a working relationship with him. (144)

一般論に反旗を翻すことは慎重に避けながら、ダーリントン卿の弁護に回るスティーヴンスの姿勢はお馴染みのパターンではあるが、しかしここでの彼の主張には確かに一理あると言える。

2015年の夏に、子供時代の現エリザベス2世女王が母親と伯父エドワードと共に、笑顔でナチス式の敬礼をしている1933年に撮影された写真が流出した際に、各メディアが繰り返し強調したのはその当時、如何に英国の支配階級にナチスへの好意的評価が浸透していたかという事実であった(Hastings)。このようなナチス・ドイツに対する宥和政策当時の英国社会に関する広範な研究において、Richard Griffithsは現代人が忘却しがちなこの歴史的事実を詳細に検証しているが、その中でリップントロップが英国でのナチス勢力拡大のために利用した、格好の「駒」としてThomas Jonesというウェールズ出身の元政府高官について言及している(215-217)。時の首相Stanley Baldwinと個人的にも親しかったジョーンズは、政府の職は退いた身でありながら1936年に彼とヒトラーの秘密会談を実現させるため奔走する。ヒトラーと英国首相との非公式の接触を切望するリップントロップに見込まれ、彼の要求に個人的なコネクションを駆使して応えようとするジョーンズの試みは、しかしあえなく失敗に終わ

り、グリフィスは一連の挿話を“serio-comic episode”(217)と冷笑的に評している。ウェールズの庶民の出であるジョーンズとダーリントン卿の間には勿論大きな相違点もあるものの、リップントロップの手先となる、政権の枠外にいる「アマチュア」として、二者のナチス・ドイツとの関係性と期待された役割は酷似しているが、その末路は大きく異なっている。当時の支配階級におけるナチス支持者の多くと同様に、ジョーンズは戦後もそれほど世評を落とすことなく、⁵ 1955年に死去するまで、著述家、教育者、そして慈善事業家として数々な要職に就き、影響力を保ち続けた。⁶

このような歴史的事実を考慮すれば、1930年代のダーリントン卿がナチスに籠絡された多数の中の一人に過ぎず、彼のみを非難することは不公平であるとする限り、スティーヴンスの主張はある程度、理に適っているようにも思える。しかし彼の問題は、自らの主を「多数の中の一人」と位置づけることを実は認められず、傑出した偉人であると信じずにはいられないという点にある。それゆえに、彼は一度は「トリックスター」と認めたりリップントロップを、後のパートで再び「ヨーロッパで最大の権力を握る紳士」と呼んで恥じることがない。時折の譲歩は見せながらも、結局は最終パートである「ウェイマス」の直前まで続くこのスティーヴンスのダーリントン卿の神格化が崩される契機はどこにあるのか、次章において詳しく検証していく。

5 Richard Wyn Jonesによれば、彼もまたダーリントン卿と同様にメディアによって攻撃されたが(6-7)、後述のとおりその被害は限定的であったと考えられる。

6 “Dictionary of Welsh Biography”は、彼の後半生について以下のとおり記している：“He was the Chairman of the York Trust (1934-40) and of the Elphin Lloyd-Jones Trust (1935-45). He served on many public bodies, for example the Councils of the University of Wales, the University College of Wales, Aberystwyth (President, 1944-45), the National Library of Wales and the National Museum of Wales. He was Chairman of the Royal Commission on Ancient Monuments for Wales 1944 to 1948. He became a member of the Observer Trust when that was established in 1946.”

既に指摘したように、スティーヴンスの語りにおける二つの時間の両方に「空白」が存在することは見過ごされがちな事実である。まず彼が綿密に綴る旅の記録において「5日目」のパートがぼっかりと消えているのは、なぜなのだろうか。既に図で確認したように、「4日目・午後」において彼はコーンウォールにあるリトル・コンプトンのホテルに到着し、その町に住むミス・ケントンを訪問する前の時間つぶしに日誌を書いている。そして次はもはや最終パートの「6日目・夕刻」となり、ここで彼は既に二日前の出来事となったリトル・コンプトンでのミス・ケントンとの再会の模様を物語り、そして旅の最後の地となったウェイマスでほんの少し前に交わした見知らぬ男とのあの決定的な会話を再現するのである。小説のクライマックスであるミス・ケントンとの再会が、このように二日という時差を経て回想の形で語られる構成は、主にイシグロらしい抑制の表れと捉えられることが多く、この時間的ギャップに批評的関心が向けられることはほとんどない。「ウェイマス」のパートにおいて、スティーヴンスはごく簡単に、この地に5日目の午後に到着し、帰宅前に長旅の疲れを癒すため、ここでのんびりと二泊することを決めたことを明かすのみである。4日目の夜にミス・ケントンと別れた後の、5日目前半でのリトル・コンプトンからウェイマスへの道程、更にウェイマス到着後の5日目午後から6日目の午後までの時間をどのように過ごしたのかという記述は全くない。確かに多くの読者にとって、スティーヴンスのこの沈黙の意味を解釈することは容易であろう。ミス・ケントンと別れた後、彼はこの再会がもたらした喜びと、そして心の痛みを一人じっと噛みしめ、それこそがウェイマスの波止場での思いがけない涙と告白に繋がった、と考えることは極めて妥当である。しかし本稿では、イシグロがこの旅の記録にあえて一日の空白を織り込んだもう一つの意味は、彼の記憶の中のもう一つの空白の期間を示唆するためであった、という可能性を検討してみたい。すなわち、1936年から1953年のダーリントン卿の死

まで、という本作の二つの時間の中間に位置する十数年の「空白」である。

本作における時系列を改めて整理してやや意表を突かれるのは、物語が始まる僅か3年前までダーリントン卿は生きていた、という事実である。テキスト中の二つの過去を結ぶこの期間について、スティーヴンスは固く口を閉ざしており、彼の語りの中でダーリントン卿は戦間期の国際情勢における偉大なキー・パーソンとしてか、または不当な世間的非難に晒されている死者としてか、のどちらかでしかない。唯一の例外として、リトル・コンプトンで再会したミス・セントンに迫られた際、彼はダーリントン卿の「その後」に言及し、新聞社との名誉棄損を巡る裁判に敗訴した一件に渋々触れる：“And his lordship’s good name was destroyed forever. Really, Mrs Benn, afterwards, well, his lordship was virtually an invalid. And the house became so quiet. I would take him tea in the drawing room and well . . . It really was most tragic to see” (247: イシグロによる省略)。この場面でさえ、彼は“unhappy talk”(247)を早く終わらせようと躍起になり、ミス・セントンにはこの事実を忘れるよう言い募る：“I know you remember Darlington Hall in the days when there were great gatherings, when it was filled with distinguished visitors. Now that’s the way his lordship deserves to be remembered” (247)。このような彼の様子から、恐らく彼が主人の晩年について誰かに語ったのは、これが初めてであったと推察されるのだが、しかしダーリントン卿の「記憶されるにふさわしくない姿」、「病人同然」となった彼にお茶を運ぶスティーヴンスが目撃した、口には出せない「悲劇」とはいったいどのようなものだったのか。

その語りを通じ、スティーヴンスはダーリントン卿を“a gentleman of great moral stature”(132)と称え、彼をナチのスパイと罵倒する世間の「ナンセンス」を退けてきた。しかし「3日目・夕刻」のパートの最後において、彼は例外的にダーリントン卿の末路について辛辣な表現を選び、主人よりも自らの保身に努める姿勢を見せる。

How can one possibly be held to blame in any sense because, say, the pas-

sage of time has shown that Lord Darlington's efforts were misguided, even foolish? . . . It is hardly my fault if his lordship's life and work have turned out today to look, at best, a sad waste—and it is quite illogical that I should feel any regret or shame on my own account. (211)

スティーヴンスがここで用いる“the passage of time”や“today”という言葉は長い時間の経過を示唆し、「主人にお仕えした年月」における自らの見方と、「今日」の世間の見方に相違があることを正当化しようとしている。しかしながら、遅くとも1939年9月に英国がドイツに宣戦布告した時点でダーリントン卿は自らの人生が正に“a sad waste”であったことを完全に理解したはずである。その時から、スティーヴンスは主人が社会的に、更には精神的、肉体的に凋落していく全ての段階を15年近くに亘って目撃することとなり、遂には、恐らく極めて孤独な状態で彼が息を引き取る様を看取るわけだが、それはこの自動車旅行の僅か3年前の出来事なのだ。この期間に関するスティーヴンスの沈黙のために、ダーリントン卿は時に「天寿を全うすることなく」不遇のうちに世を去った、というイメージで語られるが、⁷ 1923年の時点で彼が「50代半ば」であったとスティーヴンスが明言していることから(61)、実際には彼は80代で死去したことになる。つまり、スティーヴンスがダーリントン卿に仕えた35年間のうち、ほぼ四割にあたる年月はこの不遇時代に費やされており、彼がこれまで誇らしげに語ってきた“thirty-five years of service”(126)は、実は全く性質の異なる二つの時代に分かれていたことになる。彼は常に前半の「最良の日々」のみを「主人にお仕えした年月」として提示し続けてきたが、過去の栄光を失いきった主人の「介護人」として過ごしたこの長く暗い後半の歳月が、スティーヴンスの決して口に出されないトラウマとなっていることは想像に難くない。

7 例えば Wojciech Drag は “Darlington's political downfall was accompanied by his untimely death”(47)と著作の中で述べている。また John Sutherland も、彼が1946年に死去したと誤った主張を行っている (187)。

前述したとおり、過去とその記憶が常に中心的テーマとなっているイシグロ作品の研究において、「トラウマ」は頻繁に言及される。⁸ その文脈で議論されることの多い *A Pale View of Hills* (1982) の語り手 Etsuko が抱える我が子の自殺や、*When We Were Orphans* (2000) の語り手 Christopher の子供時代に起こった両親の失踪に比較すると、社会的に失墜した主人を十数年に亘り介護し、その死を看取するという過程が心に及ぼす傷は軽微なものに思われるかもしれない。しかしながら、Cathy Caruth や Ruth Leys が精力的に繰り広げるトラウマ研究において、トラウマの定義づけの基礎として、原因となる致命的な経験や恐怖をその場では受け止めることができず「見失う」ことが指摘されている (Caruth 64)⁹ ことを思い起こす時、スティーヴンスの回想の中の「空白」が正にその例として浮かび上がるのだ。彼がダーリントン卿との関係について目を逸らし続け、「嘘」を重ねてきたのは、実は主人が重大な政治的過ちを犯しており、「偉人」とは程遠い人物であったという事実だけではないのだ。そのことについては、スティーヴンスも、そしてダーリントン卿自身も第二次大戦開戦の時点で十分理解したはずである。スティーヴンスにとっての最も暗い事実は、その認識のもと、あらゆる面で凋落する主人をただ一人で介護し続けなければならなかった悲惨な十数年の記憶であり、恐らくはその間に抱いたダーリントン卿への失望や時に軽蔑、怒りという「偉大な執事」にあるまじき生々しい負の感情ではなかっただろうか。そしてそのような感情に対する自責の念こそが、長い介護の果てにダーリントン卿が亡くなった今、彼に僅かな非難を浴びせることも良しとせず、彼の神格化に躍起となる原動力であったのではないか。

このようにスティーヴンスをダーリントン卿の「介護人」と位置づけ、その経験がもたらしたトラウマを検証する時、彼の語りでの前半でのクライマックス

8 前述の Teo、Drag の著作は共にこれらのテーマを中心として構成されている。

9 トラウマ研究で頻繁に引用される Caruth は、著作において次のように論じている：“... the threat is recognized as such by the mind *one moment too late*. The shock of the mind's relation to the threat of death is thus not the direct experience of the threat, but precisely the *missing* of this experience, the fact that, not being experienced *in time*, it has not yet been fully known” (64: カルースによる強調)。

が自身の父親の死であったことは、重要な意味を帯びる。この老いた父親との関係においても、スティーヴンスは「偉大な」執事であった彼の全盛期の姿以外を見ようとせず、職場でミスを繰り返すようになった父親の現実から目を逸らし続けた末に、最後に心のこもった会話をすることもないまま、その亡骸と対面する。一片の肉親の情も見せず、ベッドの傍らで汚れたエプロンで涙を拭うために顔が黒ずんでいく料理人の描写の方に気を取られているかに見える、この場面のスティーヴンスの語りは小説の中で最も寒々とした印象を与えるものの一つである。しかし、父親の死を物語る語り手のほとんど無感動な声の裏には、実は今なお語ることさえできない、もう一つの惨めな死の記憶を封じ込めようとする必死の努力が隠れていたのではないか。父親の衰え、そしてその死を直視できず、その最期の瞬間に立ち会うことすら拒んだ1923年のスティーヴンスが、その理由として最大限に利用したのは正に父親の危篤状態と重なってダーリントン・ホールで開催された国際会議の重要性であり、主催者であるダーリントン卿を裏で支える自身の職務の重要性であった。しばしば指摘されるように、¹⁰ ここでダーリントン卿は彼にとって言わば実物よりも遥かに望ましく輝かしい「代理父」としても機能している。1956年時点でこのエピソードを語るスティーヴンスは、一見当時の精神状態と何ら変わることなく、職業的義務を最優先し、世界的重要性を持つ会議を取り仕切った主人に貢献した自らへの誇りに満ちているように思われるが、しかし実際には彼の脳裏の中で、小さな使用人部屋のベッドで息を引き取った哀れな父親の姿と、社会的に抹殺され、息子同然であった名づけ子をドイツとの戦いで亡くし、失意の中で孤独な死を迎えたダーリントン卿の姿が重なっていたのではないだろうか。

5

このように、ミス・ケントンとの関係における劇的な展開とは異なり、ダー

10 例えばParks 50を参照のこと。

リントン卿へのスティーヴンスの真の思いは、彼の記憶の中の空白の年月に封じ込められていた。しかしここでもやはり「語る」という行為が、彼をこの空白と向き合わせ、波止場での「告白」へと導いていく。極めて断片的な形にせよ、再会したミス・ケントンにダーリントン卿の「介護人」として過ごした日々について初めて語ることで、スティーヴンスは遂に「偉人」でも「戦犯」でもない、過ちを犯し、それを認めた生身の人間としての主人の姿を見つめ、波止場での聞き手に向かって、彼は「悪人ではなかった」(255)という単純な真実を告げることができたのではないだろうか。スティーヴンスは、漸くここで過去の栄光からは程遠い姿でこの世を去った亡き主人を、更には亡き父親を、真に悼むためのプロセスを開始したのである。彼の旅の日誌の中の空白の「5日目」は、前日に起こったミス・ケントンとの再会を反芻する時間であると共に、スティーヴンスが自らの記憶の中の空白を直視し、二つの過去を繋ぎ合わせるための時間であったのだ。

しかし一方で、イシグロがスティーヴンスにダーリントン卿の死の模様を克明に語らせることなく、空白の「5日目」によって彼の記憶の中に封じ込められたトラウマを匂わせるだけに留めていることもまた、確かである。ここにもイシグロのトレードマークである「抑制」を見ることは勿論可能であるが、前述したように近年著しい発展を遂げつつある記憶研究やトラウマ研究の分野において新たな関心を集める、Anne Whiteheadの言葉を借りれば“the art of forgetting”(153)、すなわち「忘却術」の効用もまた示唆されているのかもしれない。¹¹ 十数年に亘るトラウマを抱えてきたスティーヴンスに、余りに悲惨な記憶から目を背けてきた自己防衛の姿勢を劇的に修正させることはしないまま、作者はスティーヴンスの過去への長い旅の記録を静かに閉じる。二つの時間の

11 ホワイトヘッドは著書*Memory*を次の言葉で締めくくっている：“I therefore propose to close . . . by arguing that a mode of forgetting *which holds the past in reserve* is not only possible (‘allowed’) but also to some extent desirable; that forgetting, paradoxical as it may seem, constitutes a crucial if not essential element in the future trajectory and direction of ‘memory’ studies”(157: ホワイトヘッドによる強調)。

交錯というモダニスト的テーマに、第二次世界大戦から21世紀に至る現代史から生み出された記憶、トラウマ、忘却を巡る新たな視座を織り込んだイシグロは、スティーヴンスの旅の記録の中に空白の一日を創り出すことを選択した。この一見ささやかな仕掛けによって作者は、それぞれ異なる道のりから生み出されたスティーヴンスの二つの告白が、彼の倫理的転回の到着点ではなく、人生の黄昏に訪れた通過点であることを密やかに示唆しているのだ。

引用文献

- Caruth, Cathy. *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative and History*. Johns Hopkins UP, 2016.
- Currie, Mark. *About Time: Narrative, Fiction and the Philosophy of Time*. Edinburgh UP, 2007.
- “Dictionary of Welsh Biography.” *The National Library of Wales*.
<https://biography.wales/article/s2-JONE-THO-1870>
- Drag, Wojciech. *Revisiting Loss: Memory, Trauma and Nostalgia in the Novels of Kazuo Ishiguro*. Cambridge Scholars Publishing, 2014.
- Griffiths, Richard. *Fellow Travelers of the Right: British Enthusiasts for Nazi Germany*. Oxford UP, 1983.
- Hastings, Max. “The Queen Is Blameless—But Many Aristocrats DID Support the Nazis during Second World War.” *Mail Online*. 20 July 2015. <https://www.dailymail.co.uk/news/article-3167622/MAX-HASTINGS-Queen-blameless-aristocrats-DID-support-Nazis-Second-World-War.html>
- Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. Faber and Faber, 2005.
- Jones, Richard Wyn. *The Fascist Party in Wales: Plaid Cymru, Welsh Nationalism and the Accusation of Fascism*. U of Wales P, 2014.
- Leys, Ruth. *Trauma: A Genealogy*. U of Chicago P, 2000.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. Penguin, 1992.
- Parks, Adams. *Kazuo Ishiguro's The Remains of the Day: A Reader's Guide*.

Bloomsbury Publishing USA, 2001.

Phelan, James. *Living to Tell about It: A Rhetoric and Ethics of Character Narrator*. Cornell UP, 2005.

Ricoeur, Paul. *Time and Narrative*, vol. 2, translated by Kathleen Blamey and David Pellauer. Chicago UP, 1985.

Sutherland, John. *Where Was Rebecca Shot?: Curiosities, Puzzles, and Conundrums in Modern Fiction*. Phoenix, 1999.

Teo, Yugin. *Kazuo Ishiguro and Memory*. Palgrave Macmillan, 2014.

Waugh, Patricia. “Kazuo Ishiguro’s Not-Too-Late Modernism” *Kazuo Ishiguro: New Critical Visions of the Novels*, edited by Sebastian Groes and Barry Lewis. Palgrave Macmillan, 2011. 13-30.

Whitehead, Anne. *Memory*. Routledge, 2009.